

## 十月の御教え

親は、心配させる不肖な子ほどふびんに思うであろう。神も、神の心を知らないでいる者ほどかわいいと仰せになる。親を頼ってくる子には、うまい物でもやれるが、来いと言っても、何かと逆らい、親を敵のようにして、よそへ出てしまふと、どうしているだろうかとふびんに思う。親がそうして子をかawaiiがるのも、神が人間をかawaiiがってくださるのも、同じことである。

……「天地は語る」第三十三条……

## 解説

この御教えは前の三十二条と同じく、「神様の御思い」を「子に対する親の思い」に例えて現わされたものであります。前の条文では「不幸せな子ほど神の思いは強い」との事でしたが、この御教えは、それより進んで「神の心を知らず、逆らう子ほど可哀そうでならない」との御心であります。昔は親の言うことを聞かない不肖の子を「親でも子でもない。家から出ていけ！」と勘当することがあったようで、子供は「それなら、出て行ってやる！」と、家を飛び出し、親に見切りをつけますが、親の方は「ああ言ったものの、あの子は今頃どうしているだろうか、日々の生活に困ってはいないか、病気をしてはいまいか」と、心配は尽きないものです。その様に、私達が「神の綱が切れた」「神も仏もないものだ」と思っても、かえって神様は、その様に思う氏子を「不憫な子だ、早く神の心を知り、助かってくれよ」と、ずっと見守って下さっているのであります。それが神様の思い「神心」であります。